

25時行動委員会・富山 通信 7

2015.10.
25時行動委員会・富山
(090-7744-0122 藤岡)
E-mail:25h.action@gmail.com
Url:http://25h-action.blogspot.jp/

2015.10.4 〈25時行動委員会〉 ——「プロジェクト・〈ピープル〉の創り方」 序（続）

第0回：〈ピープル〉が生まれる時 その2

以下は、「戦争法案参議院強行採決」前後に国会前抗議行動に参加したメンバーが何を見、何を感じたのかの日録風報告と、まさにその時、国会前に行かなかったメンバーが、では一体何を見/視/観ていたのか、の「報告」である。

日録：国会前 9/17（木）22時～9/19（土）5時

9/17（木）

21:45 国会前到着

状況把握のため何度かぐるりと国会周辺を歩く。

国会裏側（議員会館側）歩道上には「総がかり行動」中心に約1000人。

労組ふうではなく「市民層」（30代～50代）中心。

「安保法制に反対するママの会」と思われるグループ20数名（子連れ参加）。

「全学連」「解放派」のゼッケンをつけたグループ約30名（60～70代）。

3か所くらいでコールを行う。

国会正面向かって右側歩道上には「シールズ」中心で約2000名。

国会正面向かって左側歩道上にも「市民層」約500名。

主要交差点の歩道はすべて封鎖され、大回りを余儀なくされる。
歩道と車道の間は鉄柵と装甲車で封鎖され、道路への拡大を阻止されている。
各所にスピーカーが配置され、音声が増幅するように配慮されている。

11:30 シールズが今日の行動を区切る。「終電がもうすぐです」
(昨日(参議院特別委員会審議の段階)は夜を徹しての抗議行動をしていたよう)

9/18 (金)

0:30 民主主義的社会主义運動 (MDS) のグループと一緒にいさせてもらう。

正門前左側歩道と公園の間に簡易テント。

60代前後の5~6人のグループで14日から泊まり込んでいるとのこと。

彼らは、経産省前テントの常駐体制にも参加しているとのこと。

2:00 参院本会議が休会に入ったとのことで、国会裏側の「総がかり」のコールや行動も休憩に。

正門前右側では、残った「シールズ」のメンバーが散発的にコール。

1人ずつアピールをする。この行動に加わった各自の思いや、警察の過剰警備(前日に大量逮捕された)への驚きやショック、「捕まった仲間を返せ」など。

その後完全に引き上げる。経産省テントや議員会館に泊まったとのこと。

朝までは特に動きなし。警察はひっきりなしに徘徊し、何かと簡易テントに圧力をかけてくる。

8:00 機動隊が動き出す。前日片づけた様々な規制用の機材を設置し始める。

9:00 正門両側に人が集まり始める。

ネットやメールなどで呼びかけがあった様子で、横にいた人は「9時に来いと言われたので早朝6時に出発した…」と文句を言っていた。

9:30 「総がかり」の朝一番の集会開催。

野党議員からの報告と挨拶。

「総がかり」3団体からのアピール。

以後11時、13時、15時と集会が続く。

様々な問責、不信任の提出で「闘っている」との報告、「国会外の声はとてよく聞こえています」など、国会外の声に励まされていること、「特別委員会の採決は無効だ」などという訴えが中心。

次回の選挙のことも訴えに入る。

10:00 若者の一群が大挙して登場。40人くらい。「革マル派」であった。

正門左側のやや後方で独自集会とビラまき。

12:00 参加者全体で3000人程度。



演説する福島瑞穂

正門右側の憲政記念館ぞい歩道上には帯状に労組の動員部隊。各ユニオン、建設労組、教職組がめだつ。1000人弱程度

ほかにも参加者は、国会正門前右側歩道桜田門駅入り口までの道路に沿ってと、その向かい側歩道上に集まる。「市民層」では高齢者が多い。

桜田門駅近くで「前進」の購読呼びかけと署名活動を3~4名で。

17:00 著名人も発言。鎌田慧、島田雅彦、落合恵子、石田純一など。

集会参加者からの反応は極めて好意的。

参加者は急激に増加し、全体10000人程度で、帯状に歩道に集合。右側桜田門駅入り口までの道路歩道上には給水所、携帯充電所などあり。「救急」というワッペンをつけたスタッフが歩いている。身動きが取りづらい状況に。

17:30 装甲車が歩道と車道の間で列を作り始める。

若い男性が、抗議のため装甲車によじ登り、警官に押し返される。

参加者の一群が「機動隊は帰れ」のコール。

ところどころで年配者が、機動隊員に抗議。

18:00 帰宅する年配者の人もいる。

参加者が続々と集まる。身動きが全く取れない。

参加者への誘導アナウンスが頻繁に流れる。



警察による規制

「〇〇が空いているのでそこへ流れてください」

装甲車と歩道の間で、鉄柵で囲ってあったスペースが開放される。

(あらかじめ警察と集会主催者で、打ち合わせられていた様子)

国会前正面機動隊のすぐ前にいる人たちからは「(道を)開けろ」のコール。

前に圧力をかけている。必死で止めるスタッフと弁護士。

「開けろ」のコールを止めるように、スタッフがミニ拡声器で別コールをかける。

先ほどの革マル派も前方へ移動し全体の集合に合流。

20:00 参加者がピーク、4万2千人と発表される。

全貌は、身動きが取れないのと、装甲車とで全く分からず。

集会が「総がかり」から「シールズ」に交代するとのこと。

「総がかり」は国会裏側に移動すると案内あり。



行動のピーク

これ以後国会正面右側は「シールズ」が、左側も

「シールズ」の集会スタッフらしき若者がミニ拡声器でコールする。

国会内状況が全く分からず、携帯で随時確認。

9/19 (土)

0:00 少しずつ参加者減少

今まで正面左側にいたが、右側に移動する。

コールの合間に、時折野党議員が状況説明に来ると、そのつどミニ集会が行われる

「野党はがんばっています」「声は聞こえています」「来夏の参院選では賛成議員を落としましょう」など参院選へのアピールもあり。

また参加者からも「次回の選挙で賛成議員を落とせ」「選挙に行こう」「野党がんばれ」などのアピールやコールあり。

2:30 機動隊の動きがあわただしい。

抗議最前列に機動隊員が並び鉄柵を支える。

抗議参加者は1500人程度。

「参院本会議を通過」の知らせあり。

「強行採決反対！」のコール。

ほどなく野党議員が到着。

民主党の蓮舫氏、福山氏がアピール。

強行採決への怒りと、国会前での活動への謝意をアピールする。

次期参院選への決意なども。

「蓮舫さん、福山さんありがとうー」の声もあり。

「次期参院選では賛成議員を落とそう、選挙に行こう」というアピールが参加者から。

「デモに行こう、選挙も行こう」のコール。

「野党がんばれ」などなど。

「シールズ」の集まりは、早朝5時まで集会を続け、解散

僕も一番電車に乗るため、片付けに忙しい機動隊を横目に夜明けの国会前を離れる



鉄柵による規制

コールいろいろ

民主主義ってなんだ	これだ	民主主義はどこに	ここに
憲法守れ	9条こわすな	平和を守れ	
廃案 廃案・・	野党はがんばれ	・・	
やつらをとおすな	安倍を倒せ	などなど	

行動中感じていた違和感が次第に嫌悪感になってくるのを感じた。

「デモにはいくが、選挙には絶対いかないよ！」というコールができないものかなどいろいろ考えた。

「機動隊員にも今回の法案についてきつと悩んでいる人もいる」と発言した著名人もいた。しかし、大量逮捕を目の前にして、国家の、警察の暴力について、さすがに親和的には感じられない学生もいるのでは？と、真夜中のアピールを聞きながら思った。

なぜあの野党にそんなに期待できるのか？以前のあの民主党政権時のていたらくをどう思っているのだろうか？ 沖縄辺野古移設を認め、原発再稼働を認め、国会周辺の声を「大きな音」と言った民主党をなんで応援できるのか？ このくにの政治システム自体に大きなズレを、あるいは違和感を、またノーを、とりわけ「3・11」以降の人びとの運動は感じ、訴えたのではなかったのか？ 嫌悪感は尽きない。

しかし、今はこのようにしか言いいようがないのであろうか？ ほかに変革の方法がないから？あるいは見つからないから？「野党」に頼むしかないのだろうか？

・・・などを行動に参加しながら考えた。

その後、富山に帰り、考えた・・・

○ 「層」が違うのではないか？

09年に「自由と生存のメーデー」に参加した。今回とは全く違い、そこには自分の居場所があった。とにもかくにも面白かった。数では今回に比べとても少ないが、大事な時間を過ごせたと思う。参加層は重なる部分もあるかもしれないが、「層」の違いがあるのでは？と思った。

○ 秩序的であった今回の「国会前行動」

僕が参加した今回の時間の中では、できるだけ主催者の想定範囲を超えないように行動を抑えるよう、最大限「配慮」がなされていたと思う。とりわけ若者の政治的なものへの「嫌悪感」をなくすために、最大限「配慮」がなされているという気がした。その「配慮」が、今回の行動への無批判な全面擁護になっているのではないだろうか。 今回の行動に参加して、自分が感じた嫌悪感は正しかったのだと思う。その嫌悪感は、変革のイメージの乏しさ、貧しさについて感じたことであり、自分の感性はその貧しさに、侵されていないということであったと思う。その感性を私はこれからも信じたいと思う。

プロジェクト「〈ピープル〉の創り方」を始めるにあたって

私はなにを見/視/観ていたか

—「戦争法案」をめぐる攻防の最終局面で—

#「代表制民主主義」の機能不全があらわになってすでに久しい。この間の「戦争法案」をめぐる攻防は、事態の一層の進行を告げている。「代表制」と「民主主義」の乖離は、一方に安倍の「クーデター」、他方に「反対運動」の昂揚として現出しており、その間隙は「ナンデモアリ」空間の様相を呈している。問題はその空間にナニが飛び出してくるかであり、私の関心はそこだけにむいていた。私の年来の希求からは、その空隙は「路上群衆評議会」の登場とその「民衆評議会」への転成によって占められるべきだった（「ラウンドテーブル」8・30の「レジュメ」参照）が、そこを埋めたのは、「安保全学連ぬきの60年安保闘争」すなわち「動員なき市民」連—「総掛かり行動」連・憲法学者達・〇〇大学人達・「シールズ」・野党5党・「子どもの未来を心配する」女性たち・「高校生」等々であり、「新左翼」由来の諸グループだった。

もとより「ナンデモアリ」といっても、そこがなにによって占められるかは、60年安保闘争から55年のこの列島の社会運動のありようによって、自ずから限定されており、私の年来の希求が空転することはほとんど自明のことだった。

#したがって、「戦争法案」をめぐる攻防の最終局面で、私の眼は、右眼は上記のような動静に向き、左眼は下記の事・物に向いていた。

その一つは、埼玉県熊谷市の「6人殺害事件」の「容疑者」とされているペルー人、また一つは、折から読書中の「狗賓童子の島」という小説（*1）、もう一つはたまたまレンタルした映画「上海バンスキング」（*2）。

いまそれらの事・物のひとつひとつについて詳細にふれるゆとりはないけれど、この文脈で必要な最小限のことを言うとするれば、・・・・・・・・・・・・・・・・・・+そのペルー人の（来歴、この列島での処遇、）この「戦争法案反対」にざわめく列島で途方にくれ路上に迷ったその身体~この身体と向き合うことができるかに日本の社会運動の全重量が問われているのではないか？国会前の「戦争法案反対運動」の渦中で「ここに（ある）」とされる「民主主義」の視野にこの身体は入っているか？+幕末の「隠岐騒動」、旧来からの「松江藩」の、明治に入ってから「新政府」の島支配に叛旗を翻した「島土人」たちとその「自治評議所」による騒乱~この列島の社会運動はこの騒乱の系譜を生き継いでいるか？そこで夢見られた「自治」への希求を行き継いでいるか？+日中戦争をはさむ動乱渦中の上海で、「ジャズ」を生きたい男・女の「日

本人は日本を捨てられるか」という苦悩の果ての生と死～日本の社会運動はこの苦悩を止揚しているかと言わないまでもこの苦悩と苦闘しているか？安倍の「戦後70年談話」は逆説的にこの苦悩の引き受け方を日本の社会運動に突きつけてはいないか。・・・・・・・・・・・・・・・・私の左眼は、それらのことに執着して、離れない。

#私の眼は、「戦争法案」をめぐる攻防の最終局面でその右眼・左眼がみた事・物への執着から、なお離れられないままにあるが、その「強行採決」後の風聞からは、「この結着は次の選挙で」・「さあ落選運動だ」・「大違憲訴訟！」「野党の連合を」などの声が聞こえ、きわめつけは「戦争法案廃止の国民連合政府の樹立を！」(*3)(*4)。—このたびの「戦争法案反対運動」の昂揚が、人々の希求する「平和主義」・「立憲主義」・「民主主義」への希望・期待・価値付与が安倍によって蹂躪されることへの不安・恐怖・怒りによってもたらされていることは、改めて言うまでもない。しかし、ここではその最終局面に集約的に表出され、今後を左右すると思われる、言われるところの「民主主義の危機」という焦点から「反対運動」の帰趨を見極めることをしている。

そこで思う。・・・・・・・・・・・・・・・・さあ見せてくれ、高校生諸君！文科省解禁の政治への関心とやらを！ さあやってみせてくれ、憲法学者のみなさん！「解釈」、「解釈」、「学理追求・法理探求」の後退につぐ後退の果ての「違憲訴訟」なるものを！ さあやってみせてくれ、学者・研究者諸君、〈68〉以後の荒野をさらにコンクリートで塗り固め、「学内無風」に貢献し、足下の「ユニバーシティ」の内実が空洞化されていくのを追認してきた諸君がどこまでやるか見せてくれ、どうか臆面もなく言われる「知識人の役割」なるものの「復活」とやらを見せてくれ！ さあやってみせてくれ、「シールズ」(志位るず?!)の諸君、ちやほやされ、学者先生にはげまされ、世界で最も遅れて登場したのなら、それに先立つ世界の各地の必死の営みが拓いてきた地平をふまえて、諸君の「闘いはこれからだ」という闘いを見せてくれ！ さあやってみせてくれ、「政権交代」、いや、後退につぐ後退、混乱昏迷につぐ混乱昏迷の野党連(除く共産党)の諸君、反(半?)安倍の条件反射をこえて、なにがやれるか見せてくれ！ さあさあやってみせてくれ、真打ちの口前ならぬ腕前を見せてくれ、共産党の諸君！「出かたをみて、出かたにおうじて、いやいや、ここは「国民的統一戦線」ならぬ「総掛かり」で」と隠忍自重、隠忍自重の諸君がついに抜いた「国民連合政府」という伝家の宝刀、いやいや、これは失礼、国民各界各層の盛り上がり根ざした「戦争法案廃止」という限定付きでしたネ、それでもいいからやってみせてくれ！「落選運動」でも、「選挙連合」でもやりたい人はやってみせてくれ！「都知事選の失敗をくりかえすな」と思うなら、「ポピュリスト」ならぬ「著名な進歩的知識人」でも担ぎ出してもりたてて、やってみせてくれ！自らの積年の理念にこの間の「盛り上がり」をひきよせたいのであるならば、その画期的なひきよせぶりを見せてくれ、「新左翼」由来のロートルのみなさん！

—— これでは、「代議制民主主義は安泰だ！代議制民主主義万歳！万歳！代議制民主主義」ではないか？！

#当面は、これらの「代表制」と「民主主義」の乖離に耐えられず、その空隙を埋めようとする者たちの狂奔齊走が続くだろう。私は、55年も耐えて来たし、これからも耐えられるだろう。しかし、改めて言うまでもなく、その空隙は、私・たちにとってもチャンスなのだ。べつに私は「見者」でありたいわけでも、そうであることを誇りたいわけでもない。

〈註〉

- * 1. 飯島和一（小学館 2015）の大塩平八郎の長男を「狂言回し」としたいわけゆる「隠岐騒動」にいたる島民の騒乱譜—この人は、3年おきくらいに大部な歴史小説を書いており、どれを読んでも面白く、「騒乱」の系譜を考える上で、とても大事。これまでのものは、全て「小学館文庫」にある。なお、岡部耕大作の演劇もある。また、松本健一の「隠岐島コミュニケーション伝説」がある。—NHKの大河「花燃ゆ」も、ちょうど長州藩の「奇兵隊」の挫折を扱っていて、「隠岐騒動」と対比すると、面白い。
- * 2. 「上海バンスキング」はもともとは斎藤憐の戯曲で、その上演時に大評判になったものだが、1984年に深作欣二の手で映画化された。松坂慶子・志穂美悦子・風間杜夫・宇崎竜童。のちにもう一度映画化。～「ドンパチやるよりブンチャカやろう！」
- * 3. 清義明のブログ「国会議事堂の”敗北主義”—戦後左翼史のなかの市民ナショナリズム」が、とても面白い。他にとても真面目に状況に向き合おうとしている「世に倦む日々」というブログ（*7）も参考になる。そのブログを気にしている「hajimetenoblogid.hatenablog.com」というものもある。一番最近になって見た「取り戻そう！草の根のデモクラシーNO-VOXJapan 原隆」という「21. C Democracy Cafe」の呼びかけもある。この最後のものは、「2つのデモクラシー—ナショナル・デモクラシーとしての代議制、統治者—被統治者の区別をなくす直接民主主義」という捉え方をしていて、この「ナショナル・デモクラシーとしての代議制」という捉え方と先にあげたブログの「市民ナショナリズム」という規定と重なるところがあり、この重なるところに今回の「戦争法案反対運動」の基調があるのではないかと、私は思っている。ただ不思議なことに、例の「台湾ひまわり革命」には触れていない。—これまでのところ、それに触れたのは、8月の園良太君、最終局面での平井玄さんtwitter、白石嘉治さん（「図書新聞」2015/09/19）だけ。
- * 4. ここでとても乱暴なことだが、「強行採決」後のさまざまな主張を、試みに簡単に整理してみると、以下のようなになる。—一端に「清義明」のものがああり、もう一端に「世に倦む日々」の主張があり、その間に、右には上で触れた今後のとりわけ「参院選」にむけたいろいろな提案・主張があり、その左端に近いところに**共産党の提案**があり、ほぼ左端というべきところに上で触れた**NO-VOXの人のもの**、**園君のもの**がある、ということになる。（「新左翼」由来の諸グループ（*5）は、その線の左のどこかにある？）……………そして、その線の外に、私などの〈妄想〉（*6）があるということだろうか？こんなことをするのも、要は自分なりの運動の水準をとらえる基準を持ちたいという思いからのこと

だ。—それらの主張の数々を「資料集」としてまとめてみたいものだ・・・・。

- * 5. 「新左翼」由来の諸グループと言っても、いろいろあるので一概には言えないが、典型的には、上でふれたNO-VOXの人のもの、「たたかうあるみさんのブログ」にある4回にわたる「中間総括」のその最終回の「革命的左翼は何をなすべきか？」はまさにそれにあたる。一読することをすすめる。
- * 6. 以上のようにみえてくると、数の上では問題外であるにせよ、私は自分が辿っている路がどんなに細々としたものであるにせよ、間違っているわけではない、とますます確信するばかりだ。—〈日本の構成的解体〉へむかう21世紀の安保闘争を！それをになう「**ピープル創出の構想**」を！それを現実に変化する「**ピープルが生まれる時**」=騒乱の噴出のための「**導火線**」を！
- * 7. 「世に倦む日々」というブログについては、「強行採決」後の以下の3つがおもしろい。—
・「敗北を勝利とスリカエ自己陶醉する「デモ=民主主義」の倒錯」・「共産党の「国民連合政府」提案—敗北の総括回避」・「SEALDs運動とは何んであったか」
なお、SEALDsについては、**辺見庸のブログ「私事片々2015年9月15日~」**に注目—これにはたくさんの「批判」(?)が集中したらしい。

●プロジェクト「〈ピープル〉の創り方」を スタートさせるにあたって

#ここで改めて、「〈ピープル〉の創り方」というプロジェクトをスタートさせることを、提案したい。

すでに8月末に「ラウンドテーブル」の場を借りて、「戦争法案」をめぐる攻防の最終局面で、「戦後70年：騒乱譜」の「番外編」として「〈ピープル〉が生まれる・・・・????」という試みを行った。また、その後「ワークショップ」という形で、6人の「戦争法案」をめぐる意見をとりあげ論議することも試み、その折りに一番「評判」のよかった柿木伸之さんの著作から、「戦後70年談話」に対抗しようとする「私・たちの告知」のその〈先〉を考えるうえで大事であると思われるもののコピーも配った。したがって、私としては「〈ピープル〉の創り方」というプロジェクトをスタートさせるということの合意をえて、その先を進めるつもりだった。

その後、「戦争法案」の強行採決をめぐる攻防をみきわめようと出かけたメンバーの報告を聞くことも必要になり、私としても「戦争法案」の最終局面で—「私は何を見/視/観ていたか」をその報告にむけて提起したいと思い、整理したのが上のメモである。

改めて言うまでもなく、いいもわるいもこのたびの「戦争法案反対運動」は60年安保闘争以来の人々の動きがあり、「盛り上がり」があったことは間違いない。したがって、それをめぐる「総括」や「評価」を精査し、今後の方向性をすすめることが必要である。私としては可能な限りいろいろ

ろな「総括」・「評価」に目を通すことに努めたつもりだが、「〈ピープル〉の創り方」というプロジェクトをスタートさせること自体が、まさに私自身の「総括」・「評価」に他ならない。

人々の動きのリアルな把握にたってその〈先〉をすえることが必要であることは言うまでもないが、この間の「デモクラシー」の歴史的水準（「リベラルデモクラシー」！その現実態としてのナショナル・デモクラシー！さらにその内実にそくして言えば「国民国家によって植民地化された民主主義」（葛西弘隆）を前提にしたとまでは言わないまでも、その問いかえしがきわめて不十分な「民主主義」拝跪（はいき）には唾然とさせられる以外ない。—これでは60年安保闘争の時点における丸山真男まで「先祖がえり」していることになる。それからの55年の時間、その間のこの列島上の社会・政治運動の蓄積・系譜を無いかのようにみなす、さらにはこの間のギリシャ—エジプト—アメリカ・ウォール街—台湾「太陽花革命」—香港「雨傘革命」という先行する苦闘の〈後〉の目的意識的な継受をふまえないこのたびの「戦争法案反対運動」をめぐる全ての論議はなんなのだ。この点について、独自の運動展開を提起しなかった「新左翼」由来の人々の無残さ、その「総掛かり」運動への便乗とは言わないまでも寄りかかりは目もあてられないものだ。「民衆の盛り上がり」に依拠する」ということの無原則ぶりをみよ！

以上、「戦争法案」をめぐる攻防の最終局面のありように引きつけて、この間の「反対運動」について批判的に触れてきたが、問題が以上の点につきるわけではないことは言うまでもない。一方に、「戦争法案」を軸とする安倍の「戦後レジームからの脱却」策動による戦後日本国家の根底からの改変をめぐる攻防はいかなる地平のものであらざるをえないか、その改変に私たちが対置すべきものは何であるのかという問題、その一つの側面を構成すべき「21世紀の安保闘争」という問題—武藤一羊さんの以前からの提起にまさに今対応しないでどうするのかという問題—があり、他方に、すでに上で簡単に触れはしたが、このたびの「反対運動」の主要な起動力・推進力となってきた「民主主義」イデオロギーの根本からの再構成という問題があり、改めて言うまでもなく、その問題に向き合うことなしに、私たちはこの列島の未来をひきよせることは出来ない。私・たちは、このたびの「戦争法案反対運動」に対する私・たちの総括・評価に他ならない「〈ピープル〉の創り方」というプロジェクトで、この一個二重の問題にとりくむことを予定している。—そのプログラムについては、以下参照。

「プロジェクト・〈ピープル〉の創り方」(案)

#第0回：「ラウンドテーブル」2015・8・30「番外編」

—「2015～〈ピープル〉が生まれ・・・????」

PART 1 (プロジェクトの狙い)

#ワークショップ：第1回 2015・9・13

—「〈ピープル〉の創り方」—

(プロジェクトの枠組み・A)：

#トークセッション：第2回 2015・10・4
- 「2015～〈ピープル〉が生まれ????」
PART 2「戦争法案」反対の最終局面で
(プロジェクトの設定)

#トークセッション：第3回 2015・11・8
- 「2015～〈ピープル〉が生まれ????」
PART 3 (続プロジェクトの設定)

#ワークショップ：第2回 2015・11
- 「〈ピープル〉の創り方」 -
(プロジェクトの枠組み・B) :

#トークセッション：第4回 2015・11・29
- 「〈ピープル〉創出の構想」 = ”武藤提起” を
めぐって (プロジェクトの枠組み・B)

#ワークショップ：第3回 2015・12
- 「〈ピープル〉創出の構想」
= 2015・東アジアに関わる
孫歌+ 2つの「宣言」をめぐって
(プロジェクトの枠組み・B)

#トークセッション：第5回 2016・1
- 「〈ピープル〉創出の構想」
= 「告知」でぶつかった問題をめぐって
(プロジェクトの枠組み・B)

#ワークショップ：第4回 2016・2
- 「〈ピープル〉が生まれる時」
= 「戦後・70年：騒乱譜」
(プロジェクトの枠組み・A)

#トークセッション：第6回 2016・3
- 「〈ピープル〉創出の構想」
= 「日本の構成的解体」の方へ
(プロジェクトの枠組み・B)

#ワークショップ：第5回 2016・4
- 「2015～ピープルが生まれる????」
(プロジェクトの始点にたちもどる)

#最終回：2016??? 「私・たちの〈日本の構成的解体〉構想」
(プロジェクトの終点)

●補遺

以上の提起を記してからすでに2週間余りの時間が過ぎている。その間に「戦争法案反対運動」の〈その後〉をめぐる論議が進行している。それらの論議を正確にフォローすることは、私にとって必ずしも必要なことではないが、その帰趨を視野に入れておくことはどうでもいいことではない。そのかぎりで見ると、共産党の提起を契機に「政権構想」なるものをめぐる論議が行き交っているようだ。なかにはすでに上で触れたブログで早くからその問題を提起しているひとびともいるが、野党間のやりとりとはべつに、真摯な論議もある。予期していたとはいえ、シールズをめぐる応酬のミニクサとは別に、その「政権構想」をめぐるやりとりも、その真摯さを疑ってはいないが、私には遠い世界のこととしてしか見えない、というよりはその論議をしている人々の「安倍打倒」のレベルが私にはとても遠いという以上のもではなく、むしろそうした論議が成り立ってしまうこの列島の社会運動圏への愛想づかしが深まるばかりだ。

改めて言えば、「戦争法案反対運動」の〈その後〉は、ここから「21世紀の安保闘争」へいたる路をいかに拓くか、「安倍打倒」を、戦後日本国家の変革を、それを構成してきた原理間の対決を通してかちとるべきものとして、据えきることができるかということ以外に、私の関心はない。それは私という一個人のことというより、すくなくとも60年安保闘争とその後を経験してきた者の共同の課題である。以上でふれたこのたびの「戦争法案反対運動」をめぐる論及も、この課題に照らしてのことである。一言わずもがなのことだが、この間よく見うけられた「戦争法案反対」と辺野古の闘いへの支援を併記できる運動感覚は、私には理解不能なことだ。いわんや、このたびの闘いを「安保闘争」などと言うことは理解不能でらち外のことだ。

なお、すでに「通信」6の末尾でふれたが、栗原康×マニエル・ヤンの対談（「図書新聞」2015・9・28）はこの間の「戦争法案反対運動」をめぐる言説のなかで唯一つ共鳴できるものだ。－「国会に人っ子ひとり入れさせないぞ」くらいの発想からはじめたほうが、いろいろやりようがあってももしろいんじゃないか・「議会（制民主主義）にいかに圧力をかけるか」という尺度ではなく、議会という前提をとっぱらうところからはじめてみてもいいですよ。－更に付け加えるなら、上でたびたびふれた「世に倦む日々」がどんどん面白くなっている。正直に言うと「強行採決」の後が面白い。面白いなどと気楽に言うなということなのだろうが、いまのところスタンスの違いはいかんともしがたいが、今後その違いが変容していく可能性はないわけではないだろう。ぜひフォローしてみたい。